

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2019

歩いて入ってきたあの患者、痛いと言わなかったあの患者、ただのかげざだと思ったあの患者……。外来で何となく胸騒ぎを覚えた時に見逃してはいけないポイントはどこにあるのか？ 決断の手助けとなる general rule をまとめた。外来診療で必要とされる臨床決断のプロセスや、症候ごとの診察の視点が、わかりやすくまとめられている。症例も数多く掲載され、実践的な対応を学ぶことができる。

外来受診する子ども(～16歳)のうち、帰してはいけない患者は誰なのか。発熱、腹痛、食欲不振、嘔吐……。よくある症状のなかに潜む、稀だが重篤な疾患を見逃さないためにはどうするのか、いかにしてミスを防ぐか、に迫る。第2章では、東京都立小児総合医療センターの専門各科が臨場感溢れる45症例を提示。初期診断から確定診断に至るまでのプロセスと思考過程を追体験することで、実践的な対応を学べる。続編『帰してはいけない小児外来患者2—子どもの症状別診断へのアプローチ』(2018)も併せて読みたい。

外来で遭遇する感染症への基本的な対応から、ワンランク上の対応までをまとめた。この領域のトップランナーたちが、診療の基本からよりアドバンスなテクニックまでを、自身の診療や過去の経験などを踏まえながら解説。著者の失敗談やそこから学んだことなども紹介しており、「本書を読めば、外来で診る感染症診療の質が上がる！」と言っても過言ではない充実の内容。